酒田市立資料館第２３０回企画展

ありがとう４５年　未来へとつなぐ酒田の宝物

館蔵品展 その１－文化・娯楽資料－

令和５年４月８日(土)～６月４日(日)

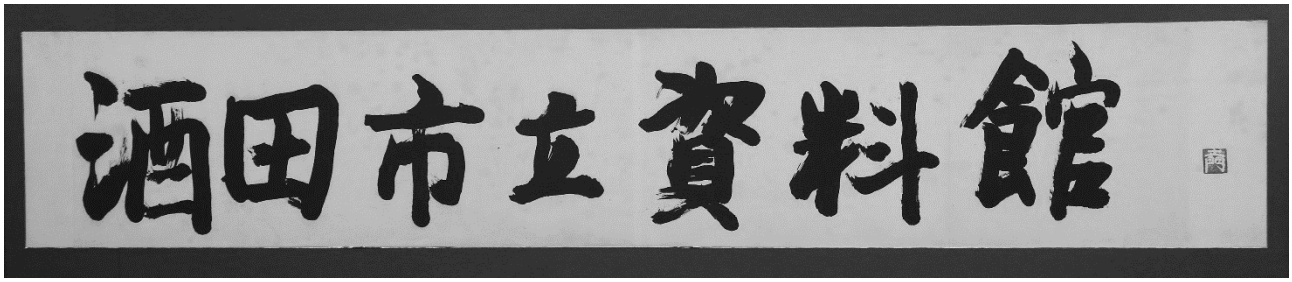
酒田大火(昭和５１年１０月２９日)の復興記念事業として、地元の歴史や文化を伝える資料を後世に伝えていくことを目的に、昭和５３年(１９７８)５月１８日に開館した酒田市立資料館。市民の皆様をはじめ、県内外を問わずたくさんの方に親しまれ、利用されてきましたが、今年９月３０日をもって４５年の歴史に幕を下ろすこととなりました。

開館直前の酒田市立資料館

今後は、酒田市立光丘文庫とともに、歴史的公文書も合わせ郷土の資料を収集、保管、展示していく施設として、令和６年度に酒田市総合文化センターの市立図書館跡に新たに開館する計画となっています。

当館が収蔵する資料の点数は、この４５年間で寄贈、寄託、購入によって約１３，０００件、６０，０００点余りになりました。当地域の歴史・民俗・産業・文化を紐解くために、次世代にも残していかなければならない貴重な宝物です。

本展では、当館での最後の企画展として、「その１－文化・娯楽資料－」「その２－歴史資料－」「その３－人物資料－」の３回に分けて、館蔵品の中から展示する機会の少なかった資料を中心に紹介します。第一弾となる文化・娯楽資料としては、酒田ゆかりの画家や工芸職人が残した作品や、娯楽の王様だった映画館の資料などを紹介します。



土門拳 揮毫「酒田市立資料館」

現在も使用されている「酒田市立資料館」の題字は、酒田出身の写真家・土門拳によるものです。昭和５３年当時、土門拳は２度の脳出血のため右手がきかず、車いすの生活を送っていましたが、相馬大作市長(当時)より直々に依頼を受け、不自由な体をおして左手で書きました。

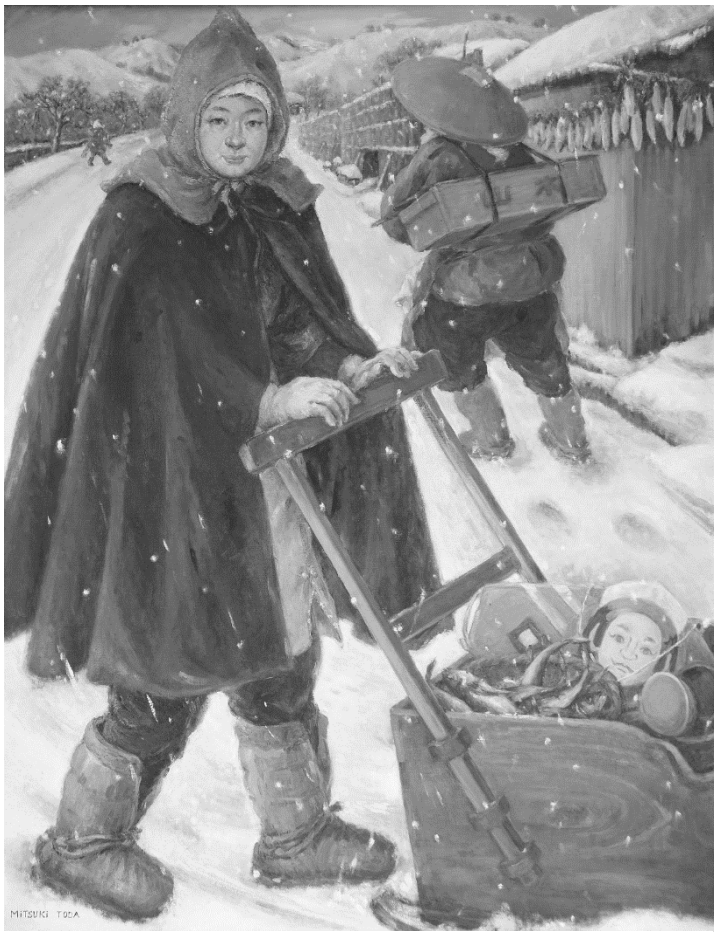
開館初日の資料館の様子
昭和５３年(１９７８)５月１８日

第１回企画展「酒田のあゆみ」は８月２７日まで開催されました。縄文時代の石器や土器などの考古資料から、江戸時代の絵図、古文書などの歴史資料、鵜渡川原人形などの民俗資料まで、さまざまな分野の資料を展示して、酒田の歴史をたどりました。

資料館開館のテープカット
昭和５３年（１９７８）５月１８日

左から、佐藤三郎資料館協議会長、斉藤辰夫市議会議長、相馬大作市長、阿部久米吉酒田市教育委員会委員長代理、入館第１号の市民、画家・戸田みつき。

戸田みつきがハサミではなくテープを持っているのは、開館に合わせて来館してくれたので、急きょテープカットに加わってもらったためです。
※役職は当時のものです。



戸田みつき「雪国寸描」（油彩・８０号）／昭和

戸田みつき
／明治３９（１９０６）～平成８年（１９９６）

飽海郡観音寺村（旧八幡町）生まれ。酒田高等女学校（現在の酒田西高）を卒業後、日本画家・結城素明に師事し、東京女子美術学校（現東京女子美術大学）に入学。

卒業後は大分県大分市の岩田実科高等女学校（現在は岩田中学校・高等学校）に勤務しました。

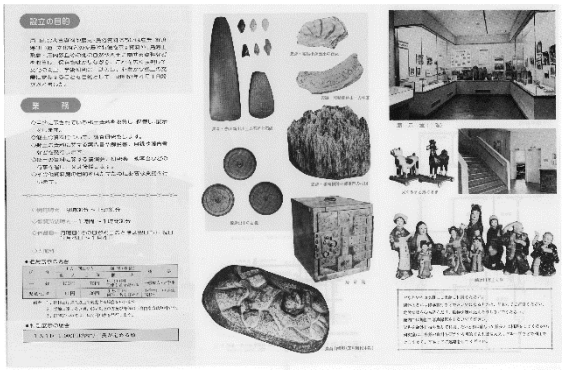
昭和５年（１９３０）、第７回白日会に入選。このころは西荻窪に住み、若くして亡くなった酒田出身の画家・小野幸吉とも交流がありました。

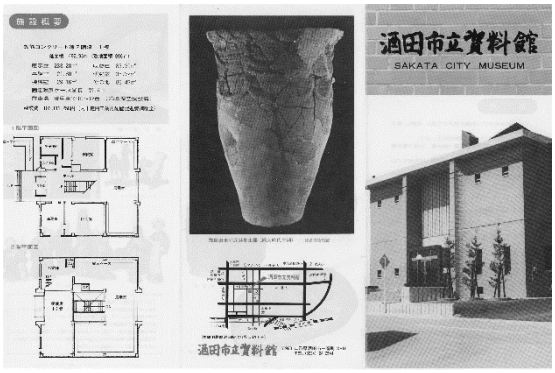
その後、洋画に転向し、昭和３８年（１９６３）に武者小路実篤が創設した大調和展に出品。翌年には会員に推挙され、同４５年（１９７０）に同展の会員佳作金賞を受賞しました。

ハンコタンナ姿の女性など働く庄内の女性、鳥海山など庄内の風土をテーマにした作品を多く描いています。

この作品は、資料館が開館した時に戸田みつき自身から寄贈されました。当時、戸田みつきから送られた手紙も資料館に残っています。

開館当時のパンフレット





資料館開館時に「酒田市立光丘図書館」から譲り受けた資料

酒田市立資料館ができるまで、酒田市には歴史的な資料を総合的に収集、保管する施設がありませんでしたが、現在の「酒田市立光丘文庫」の前身にあたる「酒田市立光丘図書館」では、古文書などの文献資料以外に、民具や武器、考古資料などを収蔵していました。

資料館では開館にあたって、光丘図書館から文献以外の資料約１，９００点を譲り受けています。現在、２階の常設展示室に展示している黒森遺跡や城輪柵跡の出土品、亀ヶ崎城関係の資料をはじめ、酒田の歴史や文化を伝える貴重な財産として、今日まで保管してきました。

昭和５８年（１９８３）撮影

素懸紺糸威最上胴丸／江戸期

松山藩三代藩主・酒井忠休が着用した「紺糸威最上胴丸」に似ており、何代かは不明ですが、松山藩主のものと考えられている甲冑です。

兜の前立（※１）には庄内藩主酒井氏の合印（※２）を表した「抱き角」があり、兜の鉢は錆地二十八間筋兜で、錏（※３）は紺糸威黒塗板が三枚で、吹き返し（※４）に花菱紋を打っています。胴丸は最上胴丸といい、胴は鉄の帯状の板札を素懸に威し、両脇の四か所に蝶番があります。甲冑を入れる革張りの箱には、庄内松山藩の「隅入平角片喰紋」が描かれています。

※１　前立…兜の前方につける装飾。

※２　合印…戦場で敵味方を区別するための標識。

※３　錏…兜の鉢の左右から後方に垂れて首を覆うもの。

※４　吹き返し…兜の錏の両端を左右にひねり返した部分。

六十二間小星兜／年代不明

有栖川宮熾仁親王の御用弁当箱／年代不明

有栖川宮熾仁親王は、戊辰戦争では東征大総督として出征した人物です。この陶製の弁当箱は、日清戦争の時に参謀総長として下った広島大本営で使用したもの。どのような経路で光丘図書館が所蔵するに至ったかは不明です。

本間蕣華「桜蒔絵盆」／年代不明

本間蕣華は明治２７年（１８９４）に酒田に生まれた漆芸家。琢成尋常高等小学校卒業後、鶴岡の田村青畝の元で蒔絵の修業をしました。２１歳で上京し、漆芸家の辻村松華に師事し、技術を磨きました。

戦後は国宝修理にも携わり、皇太子の結婚、皇孫誕生の際は宝剣の箱に蒔絵を施しています。展覧会などでは何度も入選し、日展審査員も務めました。

平成３年（１９９１）没。

玩具 犬と馬／昭和初期

車輪のついた台に木製の馬や犬をのせて引いて遊ぶ、男児向けの玩具です。

酒田市立光丘文庫の歴史

大正１２年（１９２３）、本間家三代当主・光丘の功績を顕彰する頌徳会が、本間家八代・光弥より先祖伝来の蔵書２万冊などの寄贈を受けて財団法人光丘文庫を設立し、同１４年に「光丘文庫」が開館しました。

光丘は、宝暦８年（１７５８）から４０年近くにわたって、修学のために文庫を兼ねた寺院の建立を江戸幕府に願い出ていましたが、新寺停止の政策により、実現することはできませんでした。その遺志を継いだのが光弥です。

昭和２５年（１９５０）の図書館法施行に伴い、酒田市は光丘文庫の建物の一部と蔵書の一部を借りて「酒田市立図書館」を開設。同３３年、財団は建物と蔵書などを市に寄付し、その事業を市に引き継いで解散しました。この時、酒田市立図書館の名称を「酒田市立光丘図書館」と改称しました。

昭和５７年（１９８２）、酒田市総合文化センター内に酒田市立中央図書館が開設されたことに伴い、光丘図書館を古典籍や郷土資料を専門とする図書館分館とし、「酒田市立光丘文庫」に改称しました。

建物等は平成８年に酒田市指定文化財になりましたが、老朽化に伴い同２９年度に酒田市役所中町庁舎に移転しました。

令和６年度には、資料館とともに郷土資料を保管・収集・展示する新たな施設としてスタートする予定です。

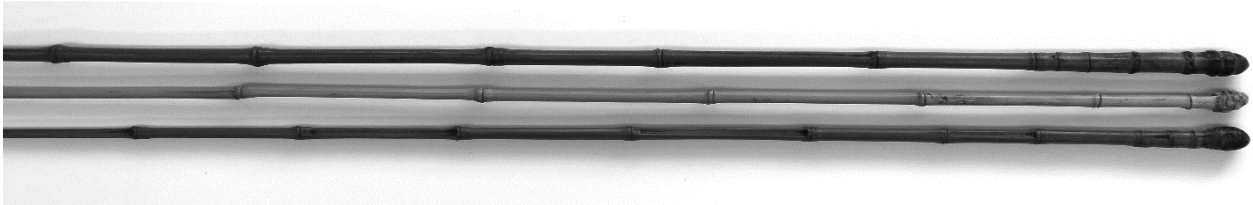
江戸時代から受け継がれてきた庄内の釣り文化

海で楽しむレジャーの代表格といえば釣り。庄内では、戦乱が収まった江戸時代、自ら釣りをした庄内藩主が、尚武（武を尊ぶこと）の心を養うために藩士に磯釣りを奨励し、武門のたしなみとして一気に広まったといわれています。庄内藩士にとって磯釣りは魚との「勝負」であり、「昨日の勝負（釣果）はどうだった」という挨拶が交わされたそうです。

藩士たちは、庄内に自生するニガタケで手作りした一本竿を使用していました。次第にその中から腕の良い竿師が現れ、庄内伝統の和竿である「庄内竿」が確立されました。

現在では海外にもファンがいるという魚拓も、庄内藩が発祥の釣り文化です。現存する最古の魚拓は、庄内藩九代目藩主・酒井忠発（ただあき）が天保１０年（１８３９）に江戸の錦糸堀で釣り上げたフナの摺形。鶴岡市郷土資料館に所蔵されています。

黒鯛（クロダイ）の魚拓／昭和１３年（１９３８）



庄内竿（部分）

「庄内竿」と「酒田竿」

江戸時代から伝えられてきた「庄内竿」は、庄内に自生する苦竹で作った一本竿のことをいいます。一方で、アマチュアを含めた庄内の竿師が苦竹以外の竹で作った竿も、一般に庄内竿と呼ばれてきました。武道として釣りが広まった鶴岡と違い、酒田では釣りは庶民の遊びとして楽しまれてきました。その中で庄内竿の伝統技法を受け継ぎながら、苦竹より堅いホテイ竹、軽くて扱いやすいカラ竹などで自家用の竿が作られ、中山賢士をはじめとする多くの釣り人たちが優れた竿を残しています。

ホテイ竹の竿は、特に小物釣り用として絶妙な感触を楽しむことができ、たくさんの人に愛用されました。

今回展示しているのはすべて酒田で作られた竿です。広い意味で「庄内竿」として紹介していますが、平成４年（１９９２）に開催した資料館の企画展「酒田竿と釣り師」では、庄内竿の伝統を継承しながらも、酒田独特の竿であるという意味で「酒田竿」の名前で展示をしています。

大漁旗

大漁旗は本来、無線などの通信手段がなかった時代に、漁に出た船が港に戻る際にいち早く大漁を知らせるためのものでした。遠目から見ても分かる派手な色合いで、鯛や日の出などの吉祥柄があしらわれています。

昭和３０年代頃から作られたとされますが、正確な歴史は不明です。友人・団体から船主に送られる事が多く、旗には送り主の名前が染め抜かれています。

旗は「筒描き」技法で作られ、線を残す部分に糊を絞り出し、その糊を土手代わりにして刷毛で染めます。ぼかしつけ、デザインもすべて手作業となり、技術が必要です。

現在は祝い旗全般を大漁旗と称し、進水式や出港式などでも掲げられます。

大漁旗／昭和

酒田まつり（酒田山王祭）の立山鉾（たてやまほこ）

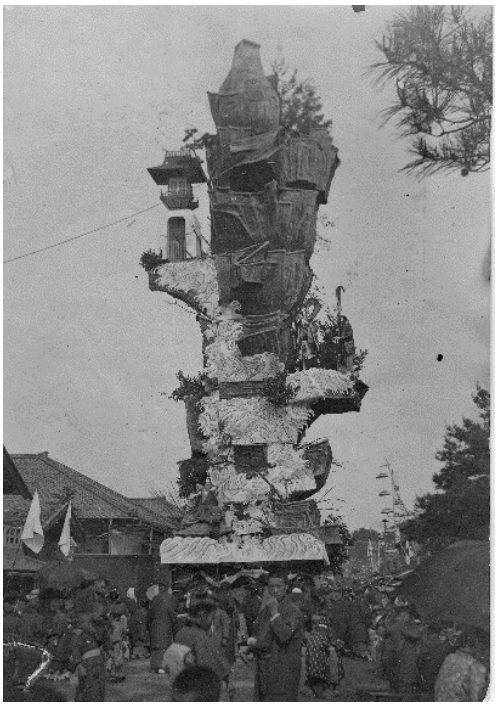
毎年５月１９日～２１日に行われている「酒田まつり」は、今から４００年以上前の慶長１４年（１６０９）に、酒田の産土神である上・下山王社（現在の日枝神社）の祭礼として始まりました。

天明（１７８１～８９）の頃から、京都祇園祭の山鉾巡業に倣った、雲を突くような高さを誇る立山鉾が練り歩く渡御行列が名物になりました。このような形式が整ったのは、酒田の豪商・本間光丘の力によると考えられています。

展示している明治３５年（１９０２）の立山鉾の肉筆画には、高さ六丈五尺（約２０ｍ）と書いてあります。現在高さが確認できる立山鉾のなかでは、最も大きいものです。

立山鉾は、酒田に電線が引かれた明治４１年（１９０８）の祭りを最後に姿を消しましたが、平成２０年の酒田まつりで、酒田青年会議所が１００年ぶりに復活させました。

立山鉾の絵は、お土産用として大量に刷ったと思われる版画も残っていますが、肉筆画は特別な注文に応じて描かれたものと考えられます。版画に比べて現存数も少なく、特に貴重な資料といえます。

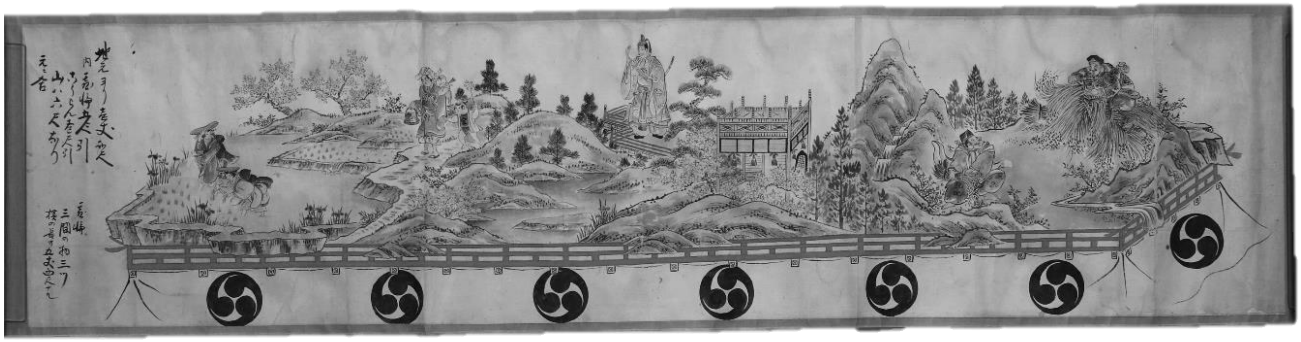


明治４０年の立山鉾

嘉永４年（１８５１）の立山鉾の版画

酒田市立資料館が所蔵する立山鉾の絵のなかで、年代が特定できるものとしては最も古い版画です。五十嵐雲嶺が嘉永４年に制作した「酒田山王例祭図屏風」（酒田市指定文化財／小野太右衛門家所蔵）に、同じ立山鉾が描かれています。

「日枝神社祭典酒田港本町一丁目神宿山鉾之図」／明治三十五年（一九〇二）



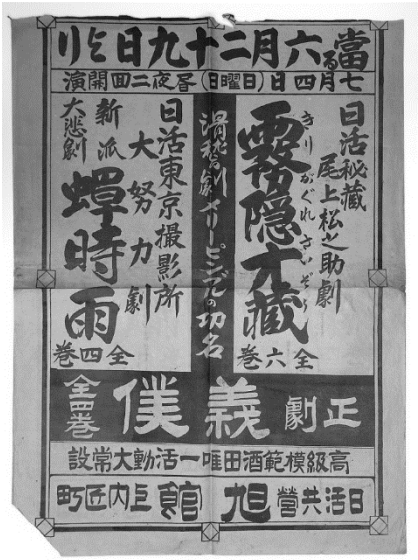
村井石斎「仁徳天皇、恵比寿、大黒豊穣山車の図」（紙本著色）／年代不明

制作年は不明ですが、立山鉾が無くなった明治４１年（１９０８）以降の山鉾のデザインと思われます。

画面左に記されているのは山鉾の大きさです。高さ３．６m、縦５．５m、横１６．４mあり、立山鉾に比べると背はだいぶ低いものの、十分に見応えがあったことでしょう。

村井石斎は明治５年（１８７２）生まれ。立花（生花の様式の一つ）の師匠であり、山王祭の山車の下絵を描きました。海向寺に六歌仙を描いた二曲屏風が、鵜渡川原観音堂に「十一面観音祭礼行列図」があります。また、旧朝日村の注連寺本堂の百枚余りの格子天井に草花を描いています。

娯楽の王様といえばやっぱり映画！　**酒田の映画館の歴史**



テレビの普及が進んだ昭和３０年代後半から４０年代はじめまで、庶民にとって娯楽の王様といえば映画でした。

酒田では明治期から映画の上映が始まりましたが、当時はまだ常設の映画館がなく、演劇や寄席興行を行っていた劇場で、数日おきに舞台にスクリーンを張って上映しました。

大正期になると大正亭（大正館）、中央館、旭館（巴館）、酒田館がオープンします。同じ上内匠町（現在は中町一丁目）にあった大正館、中央館、巴館は、客を取り合って激しく争い、ついに警察や町会議員が中に入る事態に発展。大正１０年（１９２１）に３館は合併して、中央座になりました。明治時代に劇場として開設した港座は、昭和１０年（１９３５）頃から映画の上映を優先するようになりました。

終戦後は、昭和２４年（１９４９）に洋画専門のグリーンハウスが、同３０年にはシバタ劇場がオープン。日本の映画界は全盛期を迎え、映画館は大勢の市民でにぎわいました。

昭和４２年（１９６７）に酒田劇場が閉館。昭和４９年（１９７４）にシネマ旭がオープンし、酒田の映画館は５館に増えましたが、酒田大火でグリーンハウス、中央座、酒田大映（旧シバタ劇場）が焼失。シネマ旭と港座も平成１４年に閉館しました。しかし、７年後の平成２１年、港座がイベントホールとして復活し、当時の面影を今日に伝えてくれています。

古い酒田の映画館のポスター

上は大正９年（１９２０）に上内匠町に開館した旭館のポスター。

下は、港座に東京有楽座から女性だけの弁士集団が来酒したときのポスター。無声映画の時代には、セリフや状況を解説する「弁士」が映画館に常駐しました。人気弁士の場合、映画タイトルよりも大きく名前が看板に書かれ、映画の評判も左右したそうです。

GREEN YEARS
JUNE NO1

特殊撮影のうら話
「地球最後の日」における特殊効果撮影の苦心！

17日－21日
「虹を掴む男」のダニイ・ケイ二役主演
夫は僞者
虹の女王
ジューン・ヘイヴァー君大作

GREEN ROOM

12日 ▼ 16日

喜劇王 初孫
全国巡回出演者名優総出演
酒田市 佐藤久吉門傳

今週の上映時間

	1	2	3
ニュース 彼女は二度手負	11.10 1.10	3.00 4.00	7.10 9.00
ニュース 地球最後の日	1.15 2.50	4.55 6.20	9.05 10.40

15日（日曜日）は朝10時より

「グリーンイヤーズ」第１号／昭和２７年（１９５２）

洋画専門映画館として人気を博した「グリーンハウス」で入場券購入時に配られた、映画案内の小冊子です。

グリーンハウスは昭和２４年（１９４９）５月にオープンし、日本を代表する映画評論家だった淀川長治に「世界一のデラックス映画館」と絶賛されましたが、昭和５１年（１９７６）１０月、酒田大火の火元となり焼失しました。現在も当時を知る市民に語り継がれ、平成２９年にはドキュメンタリー映画「世界一と言われた映画館」が公開されています。

グリーンイヤーズは昭和２７年６月１２日に第１号が発行され、酒田大火直前の昭和５１年１０月２３日に発行された１０２９号まで続きました。

酒田市民盆踊り大会

酒田市民盆踊り大会は、酒田有線放送が主催して、昭和３０年（１９５５）から毎年、日和山公園で開催されていた、酒田の夏の風物詩でした。市内の踊りのサークル、町内会など、さまざまなチームが参加して、踊りを競いました。『目でみる酒田市史』によると、８月１６、１７日の夜に開かれ、涼みがてらの見物客でにぎわったそうです。

優勝旗は大会２年目の昭和３１年に、中町にあった小袖屋が作ったものです。

酒田市民盆踊り大会優勝旗／昭和期

昭和３８年（１９６３）頃の盆踊り大会

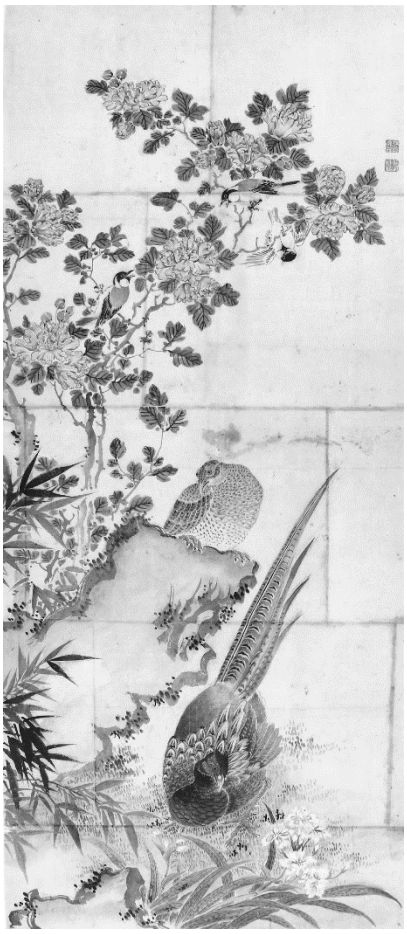
展示資料（絵と工芸品）

４月８日(土)～５月７日(日)展示

１. 加藤雪窓「雪中鹿図屏風」／年代不明

２. 後藤三惣「透彫鶏籠置物」／江戸後期
（酒田市指定有形文化財）

３. 佐藤梅宇
「竹の図」／江戸期



４. 梅月「花鳥図(雉)」／江戸期

５. 五十嵐雲嶺画・国華賛
「萩の図」／江戸期

６．本間花圃「富士に撫子図」／明治３７年（１９０４）

８．伊藤久内「酒田獅子頭」／昭和

９．江戸期の「酒田獅子頭」
／安政２年（１８５５）

７．根上富治「薔薇小禽図」／明治期

１０．田畑久作「三ツ重曲菓子器」／大正期

１１．光丘彫 盆と茶托／昭和８年（１９３３）

１２．斎藤八惣八「磯草塗角茶櫃」
／平成７年（１９９５）

１３．池田退助「本間焼　黒楽茶碗・赤楽茶碗」
／平成１１年（１９９９）

１４.高橋徳五郎　文箱と硯箱（欅製）／昭和期

１５.伊藤久内（七代）　船箪笥（帳箱）／昭和～平成

１６．鉄砲屋亀斎　十種木硯箱／明治３９年（１９０６）
（酒田市指定文化財）
※４月２８日～５月７日の期間限定展示

１．加藤雪窓　「雪中鹿図屏風」／年代不明

加藤雪窓…明治５年（１８７２）～大正７年（１９１８）

秋田に生まれ、本名は久則、通称は達也といいました。幼い頃に両親を亡くし祖父に育てられ、雪窓の絵の才能に気付いた祖父に伴われ全国を旅し、絵や詩文を学びました。明治２２年（１８８９）から酒田に住み、同２９年（１８９６）、有志の支援により上京しました。日本画の大家・橋本雅邦に入門し、さまざまな展覧会で受賞を重ね、「釣艇夕照図」「擔薪読書図」は宮中に収められました。

雅邦の後継者として将来を嘱望されたといわれていますが、明治４０年（１９０７）頃、事情により酒田に戻りました。酒田では今町観音小路（現日吉町）に住み、漢学者・須田古龍、素風家・竹内淇州など酒田の文化人と交流し、多くの書画を残しています。卓越した画力で風景画、山水画、南画など多彩な絵を描きました。

２．後藤三惣「透彫鶏籠置物」／江戸後期　≪酒田市指定有形文化財≫

後藤 三惣…享和２年（１８０２）～安政２年（１８５５）

新堀出身の木彫り師で、「庄内の左甚五郎」と呼ばれるほどの腕を持っていました。

天保の末、庄内藩より選ばれて日光東照宮の修理に派遣されて、８年間従事しました。この間に、自分の作品と甚五郎の作品を取り替えた疑いをかけられ、投獄されました。特別の許可を得て、獄中で造ったといわれる傑作が、この「透彫鶏籠置物」です。籠とその中の鶏３羽は、別々に彫られたものではなく、一本の木から彫り出した一本彫りです。

三惣はこの一件で特別に許しを得て、庄内に帰されたといわれています。

３．佐藤梅宇「竹の図」（紙本墨画）／江戸期

佐藤梅宇…生年不詳～安政４年（１８５７）

飽海郡荒瀬郷の大庄屋の家に生まれ、幼少期より絵の才能があった梅宇は、江戸の絵師・谷文晁（たにぶんちょう）に絵を学びました。花鳥画や人物画を得意とし、特に見事な梅の絵を描いたといいます。後に庄内藩の組外（くみはずれ）（給人の役職のひとつ）となって飛島の島役人を勤め、しばしば飛島へ渡りました。飛島の風景や産物、人々の暮らしの様子などを生き生きと描いた『飛島風俗図巻』（鶴岡市郷土資料館所蔵）を残しています。

４．梅月「花鳥図（雉）」（紙本著色）／江戸期

梅月…文化１１年（１８１４）～弘化３年（１８４６）？

酒田内町組の大庄屋・伊東家に生まれ、彫刻師の文錦堂（ぶんきんどう）（白崎善次郎）の養女となり、江戸で絵を学んだと伝わる女性絵師です。書や俳句、和歌、歌や舞にも秀でた才女でしたが、惜しくも３３歳の若さで亡くなったといわれています。その年齢で画風の確立にまで至ったのかは、現在残されている作品からは分かりませんが、花鳥や山水を描く繊細で穏やかな雰囲気に、梅月らしさがあるように思います。

５．五十嵐雲嶺画･国華賛「萩の図」（紙本墨画淡彩）／江戸期

五十嵐雲嶺…生没年不詳

飽海郡吹浦に菅原某の子として生まれ、のちに酒田八軒町川端の五十嵐染屋の養子となりました。幼少のころから絵が得意で、仙台の絵師が庄内に来た際にその人物に絵を学んだといいます。

染物屋の傍ら絵師として活動しました。嘉永年間（１８４８～５４）に木版画「酒田十景」の原画を手掛けています。また「上山王例祭図屏」、同社の拝殿掲額などの作品を残しています。

６．本間花圃「富士に撫子図」（紙本著色）／明治３７年（１９０４）

本間花圃…天保８年（１８３７）～明治４４年（１９１１）

本間家５代目当主本間光暉（こうき）の弟光和の長男で、本名は本間光貞（みつさだ）です。光暉の養子となりましたが廃嫡（はいちゃく）し、酒井新田天王下に分家として一家を起こしました。温厚な性格で、特に草花を好んで描いたといいます。また、茶道にも堪能でした。

西行法師の歌を題としたこの作品は、絵も書も本間花圃によるものです。元は扇子でしたが掛軸に打ち直しました。

７．根上富治「薔薇小禽図」（絹本著色）／昭和期

根上富治…明治２８年（１８９５）～昭和５６年（１９８１）

酒田に生まれ、荘内中学を経て東京美術学校（現在の東京芸大）日本画科に入学し結城素明（ゆうきそめい）に師事しました。在学中に帝展（※１）で初入選し、この時の作品「雨後軍鶏」はフランスに渡り、巨匠アマンジャンに激賞されました。大正１１年（１９２２）、同１４年には特選となり、昭和３年（１９２８）から無鑑査出品（※２）となりました。昭和１１年（１９３６）からは審査員を務めています。

昭和１３年（１９３８）、同志とともに日本画院を創立。太平洋戦争中は鶴岡に疎開して制作に専念し、戦後は日展審査員として活躍しました。花鳥画を最も得意としました。

ちなみに、この絵に描かれている鳥はミヤマホオジロという鳥です。

※１　帝国美術院展覧会。官設の公募美術展。現在の日展（日本美術展覧会）。

※２　過去の入選実績などにより、主催者の鑑査なしで出品できるということ。

８．伊藤久内（七代）「酒田獅子頭」／昭和期

伊藤久内（七代）／昭和２年（１９２７）～平成２９年（２０１７）

伊藤久内は船箪笥制作の合間に、獅子頭の制作を手掛けていました。獅子頭の口の内側には「酒田伊藤久内」と署名があります。

酒田の郷土玩具・雌雄一対の獅子頭です。獅子頭には魔除け、無病息災の意味があります。

神社で奉納する獅子舞の獅子頭が、いつ頃から郷土玩具になったのかは不明です。幕末頃から明治初期に作られた小さな獅子頭が現存しますが、玩具として作られたのかは分かりません。また、一対ではなく黒い獅子頭のみが作られています。赤黒一対の獅子頭が作られるようになったのは、昭和の初め頃のことです。

９．江戸期の「酒田獅子頭」／安政２年（１８５５）

口の内側に「安政二年乙卯十月　昌義作」と彫られています。玩具というより鑑賞用のような立派な作りです。目や歯の金色の絵具がはがれているのは、長い年月によるものでしょうか。それとも子どもの頭の上でバンバンと音を鳴らして無病息災を願ったり、手に取って遊んだりすることもあったのでしょうか。昌義がどんな人物かは不明です。

10．田畑久作「三ツ重曲菓子器」／大正期

田畑久作…明治１６年（１８８３）～昭和４２年（１９６７）

檜物町（現二番町）に住んだ曲物師。浜弁当（曲ワッパ）、神棚、花器などを作り、民芸家・柳宗悦に注目されて、その技術が評価されました。昭和１６年（１９４１）の第２回東北民芸展で特選となるなど、多くの展覧会で受賞しました。

三ツ重曲菓子器は晩年の傑作といわれ、三つの菓子器が一つの器に収まるように作られています。

11．光丘彫　盆と茶托／昭和８年（１９３３）

光丘彫は光ヶ丘の砂防林の倒木を活用する工芸として明治時代に誕生した、酒田の特産品です。彫り出された模様の力強さと素朴な風合いが魅力です。お盆や茶托などが作られ、贈答品としても親しまれています。昭和初期に近代化により一度途絶えましたが、平成に入って復活しました。

12．斎藤八惣八「磯草塗　角茶櫃」／平成７年（１９９５）

色漆を塗り重ね、さらに研ぎだして仕上げた独特の模様に、奥深い美しさがある磯草塗。江戸時代中期に新潟県弥彦村の塗師が手法を考案したとされ、輪島塗の流れをくむ漆工芸品です。

その技法は、新潟から温海の横堀家へ、横堀家から鶴岡の土佐内家に伝わりました。酒田では、土佐内家に生まれ竹塗、磯草塗の技術を父親から学んだ貞次が、昭和中期頃に酒田の塗師である２代目斎藤八惣八の婿養子となって製作を始めました。貞次は後に３代目八惣八を襲名。現在は４代目に受け継がれています。

13．池田退助「本間焼　黒楽茶碗・赤楽茶碗」／平成１１年（１９９９）

池田退助／大正１３年（１９２４）～平成２１年（２００９）

本間焼は、昭和３５年（１９６０）に本間美術館の庭園の片隅に楽焼の小さな窯を造り、土産品を庭焼として作る目的で始まりました。この仕事を担当した池田退助は、美術館に所蔵されている「長次郎」「のんこう」といった名品に魅了され、独自の作品を作り上げるようになりました。その後、陶工芸の大家である村瀬治兵衛、小山富士夫の指導を受け、本格的に陶芸の道に進み、その作品は次

第に広く知られるようになりました。

14. 高橋徳五郎　文箱と硯箱(欅製)／昭和期

高橋徳五郎／生没年不明

酒田の指物の名工・斎藤兼吉の弟子。昭和５年(１９３０)の東北六県工芸競技会で１等を受賞しました。昭和６１年(１９８６)には第８回庄内文化賞を受賞し、同年８月に開催された第３５回日本海洋少年団全国大会では、常陸宮殿下、同妃殿下に作品を献上しました。

この作品は、文箱の中に硯箱が収まるようになっています。表面には、玉杢(たまもく)という渦巻き状の美しい木目の木材を使っています。作品を収める箱には徳五郎が７８歳の時の作と書いてあります。

15. 伊藤久内(七代)　船箪笥(帳箱)／昭和～平成

伊藤家は、江戸時代中期に酒田で漆工芸店を創業し、七代久内(本名久太郎)は最後の酒田船箪笥職人でした。

船箪笥は分業制で製作されていました。久内は組み立てや塗り、金具の取り付けなどを行い、船箪笥を仕上げました。この船箪笥は令和４年１２月、ご遺族より酒田獅子頭一対とともに寄贈いただいたものです。

船箪笥はもともと江戸～明治時代の北前船で使用され、船頭たちの金庫である懸硯(かかすずり)、帳箱、衣装櫃(いしょうびつ)である半櫃(はんがい)の３種類がありました。外側が欅材、内側が桐材で作られており、海に落ちても沈みにくくなっています。酒田では明治時代から製作されていたと考えられています。昭和３６年(１９６１)刊行の柳宗悦(やなぎむねよし)著『船箪笥』で紹介されたことにより、佐渡小木(新潟)、三国(福井)とともに、酒田は船箪笥の三大産地として知られるようになりました。

16. 鉄砲屋亀斎「十種木硯箱」(酒田市指定文化財)／明治３９年(１９０６)

鉄砲屋亀斎／文久３年(１８６３)～昭和２年(１９２７)

酒田の指物の名工で、本名は鈴木浅吉です。生家のあった十王堂町（現二番町）に工房を構えていました。病気で立ち作業が困難だったことから、単座で制作できる小箪笥、小机、糸巻などの作品を多く作ったといいます。亀斎の通い弟子だった斎藤兼吉とともに、当時の酒田指物界の双璧をなし、「箱物は鉄砲屋、棚物は兼吉」といわれました。

この硯箱は養老庵萬寿こと七代目伊藤四郎右エ門(※1)の依頼で制作されました。１０箱１組で、１０種類の木材（楢埋木(ならうもれぎ)、栗、欅、杉、漆、槐(えんじゅ)、橡(とち)、栁(しおじ)、黒柿、一位）を使用した、すべて同じ形の硯箱です。厚さ１分(３．０３mm)の薄い板を「両互ホゾ」という方法で組み立て、釘は一切使用していません。木材の特徴を生かした、繊細で優雅な作品です。

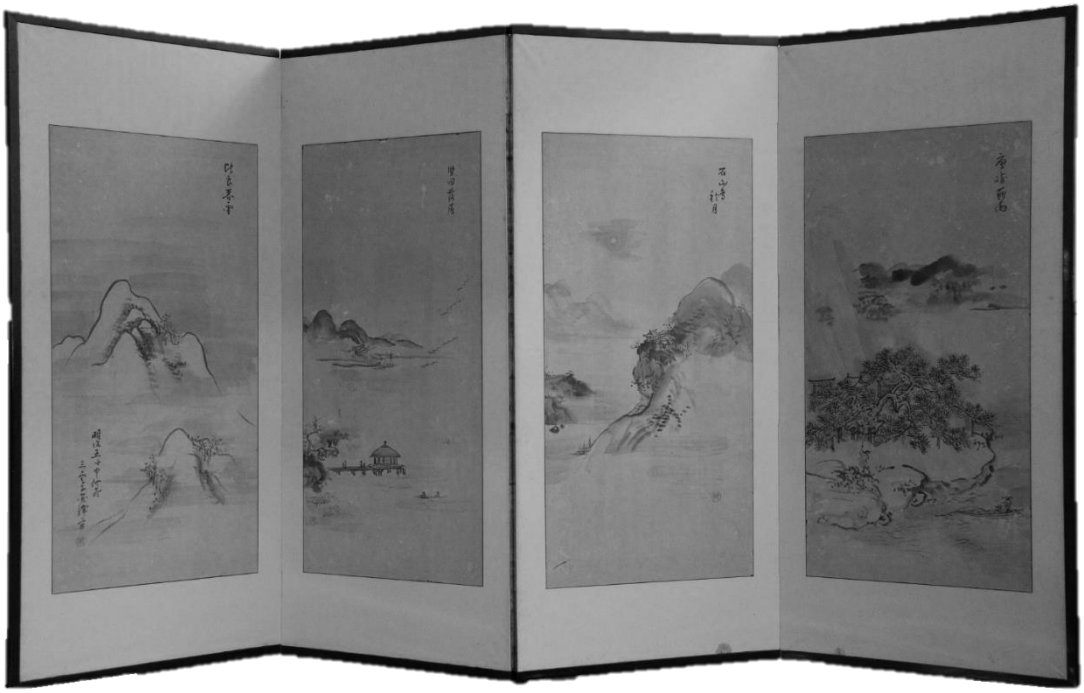
収納箱の蓋裏には「明治三十九年五月吉日　宗匠方之為新調」と書いてあります。俳諧の運座(※２)用に制作されたようですが、実際に使用した様子はありません。

昭和５０年(１９７５)４月に、酒田市指定文化財となりました。

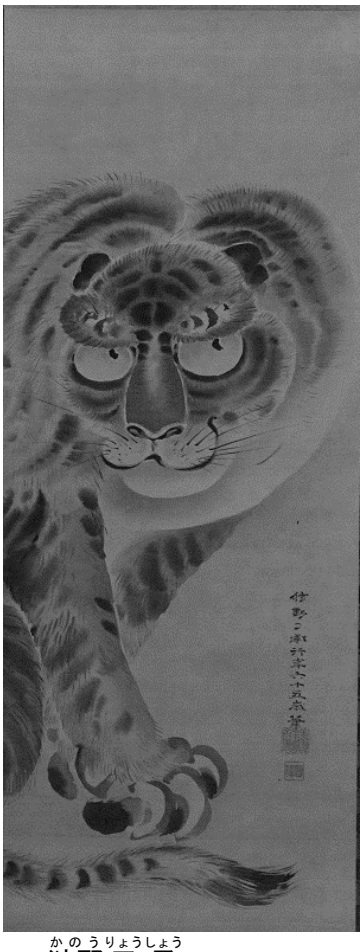
※１ 七代目伊藤四郎右エ門…酒田の大地主であり、当時の本間家に次ぐ豪商。俳諧、将棋、謡曲をたしなんだ風流人。嘉永６年(１８５３)～大正３年(１９１４)

※２ 運座…複数の人が集まり題を決めて句を詠み互選する会のこと。その参加者に使ってもらうための硯箱だったのでしょう。

５月８日(月)～６月４日(日)展示



１．市原円潭（いちはらえんたん）「石山寺竪田風景屏風」／明治五年（一八七二）



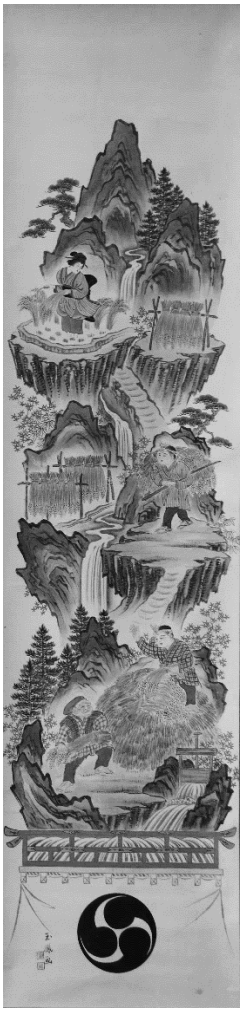
２．狩野了承（かのうりょうしょう）
「虎の図」／江戸期

３．須藤鴻拳（すとうこうきょ）
「菅公図」／江戸期

４．菅原梅里（すがわらばいり）
「三社様（さんじゃさま）」／昭和期

5. 五十嵐悌二（いがらしていじ）「布袋（ほてい）図」／昭和期

6. 池田亀太郎（いけだかめたろう）「二代目中村太助肖像」／明治期



7. 村井石斎「仲町御神宿山鉾之図」／昭和５年（１９３０）

←８. 玉鳳「酒田港船場町神宿山鉾之図」
／明治４０年（１９０７）

１．市原円潭「石山寺竪田風景屏風」／明治５年（１８７２）

市原 円潭／文化１４年（１８１７）～明治３４年（１９０１）

酒田天正寺町の呉服屋・市原平三郎の三男として生まれ、本名は祐助といいました。江戸の鍛冶橋狩野家に入門して日本画を学び、たびたび京都、奈良など西国の寺社を巡って多くの古仏画を模写するとともに、冷泉為恭（れいぜいためちか）に学んで独自の画風を確立しました。

帰郷後は鶴岡に住み、嘉永４年（１８５１）に鶴岡・大督寺で仏門に入りました。安政３年（１８５６）に再び江戸に上って小石川伝通院に学び、さらに京都・知恩院で修業し、絵画を研究しました。この頃、藤本鉄石、村井半牧などの勤王の志士と交流しました。

文久３年（１８６３）に帰郷すると、田川郡大淀川村（現在は鶴岡市）淀川寺（じょうぜんじ）の住職になりました。晩年はしばらく酒田千日堂南町に隠居しましたが、再び淀川寺に戻り、８５歳で亡くなりました。

円潭のほかに、探淵斎守真、淵潭斎守純、月山人、浮木叟などの雅号を持っています。代表作に「二河白道図」「法然上人御絵伝之図」などがあり、庄内にたくさんの作品が残っています。

２．狩野了承「虎の図」（紙本墨画）／江戸期

狩野了承／明和５年（１７６８）～弘化３年（１８４６）

酒田台町に生まれ、江戸の絵師狩野探信（かのうたんしん）に絵を学びました。後に狩野梅笑（かのうばいしょう）という絵師の養子になり、文化５年（１８０８）に養父の跡目を継いで深川水場狩野家の四代目となりました。将軍徳川家斉（とくがわいえなり）の姫たちの御用絵師（※）としても活躍し、幕末期には庄内藩の抱え絵師になったと伝えられています。

下日枝神社拝殿に奉納された懸額「韓信（かんしん）の股くぐり」や、板橋区立美術館所蔵の「秋草図屏風」などの作品が残っています。

※御用絵師…江戸幕府や諸侯の絵所に召し抱えられて絵画制作をした絵師。

３．須藤鴻挙「菅公図」（絹本著色）／江戸期

須藤鴻挙／文化２年（１８０５）～明治９年（１８７６）

本町七丁目の呉服屋に生まれ、子どもの頃に江戸本所（現墨田区南部）の絵師狩野某に画才を認められ、その養子となって絵を学んだといいます。後に分家独立して狩野派の絵師となり、四条流という画風や円山応挙の画風を取り入れました。江戸城類焼再建の折に多くの襖絵を描いたと伝わります。晩年は酒田を出て房州（千葉県）で亡くなりました。

この絵の菅公とは学問の神である菅原道真（すがわらのみちざね）のことです。

４．菅原梅里「三社様」（絹本著色）／昭和期

菅原梅里／明治７年（１８７４）～昭和２７年（１９５２）

田川郡木川村（現酒田市）の旧家に生まれた鉄道員でしたが、退職して画業に専念しました。山形の画家下條桂谷（げじょうけいこく）に師事して南北合派の画風で水墨画を多く描き、山水画を得意としました。大正９年（１９２０）には美術協会展覧会の委員を務めています。晩年は山椒小路（現本町二丁目）の庵に住みました。

この絵は伊勢神宮（三重県）、石清水八幡宮（京都府）、春日大社（奈良県）の神のお告げを表しています。

５．五十嵐悌二「布袋図」（紙本墨画）／昭和期

五十嵐悌二／明治３７年（１９０４）～昭和５０年（１９７５）

西田川郡栄村（現鶴岡市）生まれ。大正１２年（１９２３）に鶴岡中学校を卒業後、東京美術学校（現東京芸大）に入学し、在学中に帝展で「黒部峡谷」という作品が入選して注目を集めました。昭和５年（１９３０）に同校を卒業してから一時教員として勤めましたが、その後酒田に住んで日本画の制作に没頭しました。

６．池田亀太郎「二代目中村太助肖像」（絹本著色）／明治期

池田亀太郎／文久２年（１８６２）～大正１４年（１９２５）

浜町（現相生町）生まれ。酒田における油絵の先駆者で、明治１７年（１８８４）に酒田に来た油絵の大家・高橋由一（たかはしゆいち）に強く影響を受けたといわれています。後に洋画を学ぶために上京し、写真術を習得しました。

酒田に戻ってからは船場町付近で「池田写真館」を営み、撮影した写真をもとに多くの肖像画を描きました。下日枝神社拝殿の「伊佐治八郎肖像額」、酒田市指定文化財である「塩鮭図」（酒田市美術館所蔵）など数多くの作品が残っています。

この肖像画の中村太助（天保９/１８３８～明治４０/１９０７）は上中町の実業家です。商人として成功しただけではなく発明家でもあり、町会議員や商業会議所常議員を務め、町営電気事業へもかかわるなど、多岐にわたって活躍しました。

７．村井石斎「仲町御神宿山鉾之図」／昭和５年（１９３０）

昭和五年に神宿を務めた上中町下中町神宿組合が製作した山鉾の肉筆画で、デザインも村井石斎です。明治４１年（１９０８）を最後に、背の高い立山鉾は無くなりましたが、その後も迫力のある山鉾が作られていたことが分かります。

８．玉鳳「酒田港船場町神宿山鉾之図」（紙本著色・双幅）／明治４０年（１９０７）

芳潟一聲がデザインした山鉾の肉筆画。題材は表面が竜宮城（浦島太郎）、裏面が稲の収穫の様子です。佐藤三郎著『酒田の歴史』によると、この絵を描いた玉鳳は、旧伝馬町（現在は中町三丁目）で「おたふく餅」屋を営んでいた池田竹之助という人物です。